

2. アリとゾウ

これはアリとゾウがどうやって生涯の友達になったか、というお話です。

昔々、あるアリエ家は森の中に流れる川の側に住んでいました。彼らは川から水を汲んで来なければなりませんでした。それを毎日運ぶのは大変な仕事です。その一家は「葉っぱの運び屋」と呼ばれていました。彼らは葉っぱを丸ごと家に運ぶことで知られていたため、名付けの神々はそう呼びました。アリたちは葉っぱを食べるのが大好きで、5、6フィートも地下にある台所にしまっていました。食用ではない葉っぱもありました。それらは薬用で少し噛むだけで怪我が治るからです。彼らは病気や怪我に効く玉ねぎ、タンポポ、ダイコン、野生キュウリの小さな種も保存していました。

さて、アリ達はアリクイや彼らを踏んづけてしまいそうな他の大きな動物から離れて、地下で安全に暮らしていました。

ある日一家はおじいさんとおばあさんが語ってくれる物語を楽しんでいました。おじいさんが語っていた時、地中がものすごく揺れ、その後トランペットのような音が大きく鳴り響きました。

おばあさんは「サニー、どうしたのか見てきておくれ」と言いました。

その揺れはとても強かったのでお皿やカップが割れてしまいました。

「まるで地震のようだな」とおじいさんが言いました。

サニーは外で何が起きているのか見るために、素早く上がって行きました。彼はそれを見た時驚きました。

二頭の大きなゾウがドアの側に立っていたのです。一頭は後足で立って、頭を振り、前足を叩きつけました。もう一頭は鼻を使って年老いた方の耳に息を吹きかけていました。

「何が起ってるんだ？」とサニーは聞きましたが、彼らには聞こえませんでした。

「何が起ってるんだ！？」とサニーは叫びましたが、まだ彼らには聞こえませんでした。ついに彼はゾウの耳の側にある木に登りました。

「何が起ってるんだよ?!」サニーは叫びました。この時はゾウたちにも聞こえました。「女王がすごい病気なんだ」と若いゾウが言いました。

「病気が重くて死ぬかもしれない。私は医者だが助けられないと思う。すごく高い熱が出てる」医者がサニーに言った時、女王ゾウは跪いて横に倒れました。医者が言うように彼女は死にかけていました。

「どのくらい病気なの？」サニーが尋ねました。

「1週間くらいだ」と医者は答えました。

「耳から何かに感染したみたいだ」

「耳の中を見ていい？」とサニーは聞きました。

「もちろん」と医者は言いました。

「耳まで僕を持ち上げて」

「わかった」

医者は鼻を伸ばしてサニーを乗せ、持ち上げました。サニーは中を歩き始め、急に自分が困ったことに気が付きました。背中に赤い点のある大きな黒いクモが、彼をじっと見ているからです。

クログケグモ（黒い未亡人）だ！

彼は氷ついたように立って身動き一つしませんでした。

彼は周りを見渡し、なぜ女王が重病になったのかが分かりました。

クログケグモは耳の中に5、6個卵嚢を差し込んでいたからです。

クモは彼にこれ以上奥へ行けないようにしていました。クモは耳の空間全てに巣を張り、卵がかえるのを何にも邪魔されないようにしていたからです。

「女王は確実に死ぬ」とサニーは思いました。

クモが瞬きした時、サニーは耳の中からゾウの鼻に飛び出しました。

「僕を早く上に上げて！」サニーは叫びました。

クログケグモから逃れたサニーは、若いゾウの医者に見たか伝えました。

「どうしたらいいんだろう？」と医者は聞きました。サニーはおじいさんに聞いてみる、と言いました。

おじいさんに彼が何を見たか説明した後、おじいさんは何をしなくてはいけないか決めました。おじいさんは医者からクモから安全な距離で、耳に近いところへおじいさんを運ぶように言いました。

離れたところから彼は観察して医者と言いました。

「今すぐやらなければならないことはこれです」

「ロープ、たくさんのロープと槍、たくさんの薪と板が必要です」

「それとあなたのグループ全員のゾウ達の助けがここに必要です。そして最後のお願いは私の医者と親戚のところへ行くために乗り物が必要です」

サニーは下へ行っておばあさんと女性全員に、種を料理して五つの大きな器に入れるだけのソースを作り始めるよう言いました。

「私たちの家族と友達を全員集め、クモとクモの巣と悪い薬に勝つためには数百の我々が必要だ」

「それから、先生」おじいさんは言いました。「ゾウ達にココナッツの葉をたくさん持ってくるように言わなければなりません。それはとても重要なことです。あとワラも。ええ、ワラもたくさん必要です。我々は本当に素早くやらなければいけません。女王の脳に感染が届くのを止めるのには二日しかありません」

医者はおじいさんが行かなければならないところへ連れて行く若いゾウを選びました。それから医者は他のゾウ達にココナッツの葉とたくさんのワラを持って来るよう言いました。

おじいさんが行っている間、アリ達は大きな乗降場を作りその下へ全ての薪を置き、象の毛からたくさんのロープを作り、そして槍を作りました。それからみんなおじいさんが帰ってくるのを待ちました。

ゾウとおじいさんが従兄弟達の家に着いた時、すぐに従兄弟と叔母である医者になぜ助けが必要なのか告げました。従兄弟達のリーダーであるそのうちの一人が言いました。

「うん。彼らは助けられるけど、そこまで行くのに丸一日かかるよ」

おじいさんは「それは大丈夫だ。ゾウ達が全員一度に運んでくれるから帰りも心配しなくていい」と言いました。

家では種から作った特別なソースができてることを確認しました。乗降場は出来上がっていました。おじいさんは医者に従兄弟達が明日の朝くるので、女王ゾウの耳の側に足場を作らなければいけない、と言いました。

おじいさんはクロゴケグモとの戦いが始まったら怪我人が出るかもしれない、と全ての看護師に言いました。

おじいさんが伝えなかったのは、卵が孵化する頃でかえり始めたら数百のクモが出てきて戦いに負けるかもしれない、ということでした。

それは本当に女王ゾウの生死がかかっていたのです。ゾウとアリは夜行きました。

夜が夜明けに変わり始める頃、女王ゾウは家族を呼んでこの苦しみは昼まで続かないと告げました。彼女はその痛みにもはや耐えられないので死ぬ準備ができていました。

ゾウ達は全員集まって女王の死を待っていました。

彼らは皆女王の死をトランペットで悼むため、編成し立ち上がっていました。

アリ達も集まっていたが、まだ諦めてはいませんでした。

その時、彼らは行進する足音が徐々に近く、大きくなるのを聞きました。

突然、彼らは編成して行進してきました。

「ほら、従兄弟達がきたぞ」とアリは叫びました。

「彼らがやってきた！」

「うん、やってきた。軍隊アリだ！」

軍隊アリは全員迷彩服を着て戦いに備えていました。そしてアリの司令官は一連の動きを決定するため、直ちに部下に状況を把握するよう指示しました。

ゾウ達は何匹かのア리를鼻に乗せ、戦場を見せました。

「卵嚢が一つ孵化しそうだ！」キャプテンが叫びました。「それからまだ四つもあ
る！」

キャプテンはクモが生まれた瞬間、すでに彼らは戦えることに気づきました。そしてク
ロゴケグモがクモの中で最悪だということも。一刺しで即座に敵を殺せるのです。

「司令官！我々は直ちに戦闘場に移り、『死に場所』を据付けなければなりません」と
キャプテンは報告しました。司令官は足場を築くことと『死に場所』作戦を命令しまし
た。

アリの軍隊はその命令を理解しました。そのうちの何名かは生きて帰れないかもしれな
いことも。

でもこの命令はアリ達が望んでいたことでもあったのです。これは全ての命令の中の

「ジェロニモ——！」であったのです。全てのアリ達が訓練された究極の戦いの叫び
でした。

「かしこまりました！」400名のアリ達全員答えました。

最初に特別隊が強力な煙のホースを持って入り、辺り一面を酸性煙でいっぱいにしまし
た。クモ達は不意を突かれました。

2番目の兵隊グループがベタつく糸を踏まないで歩けるよう、カタパルトロープをクモ
の巣に投げながら入って行きました。空気が澄んできてアリが見えるようになると、ア
リを止めるためにクモはベタつく糸を素早く作り始めました。

「もっと煙を！もっとだ！」隊長が叫びました。

この時、酸性煙は催涙ガスに換えられ、息ができなくなった孵化したばかりのクモが外へ逃げ出しました。3番目の兵隊グループがロープをクモの周りに投げ、下に引っ張って「死に場所」にくくりつけました。

この時まで怪我人は出ず捕虜は2名でした。

また煙がなくなってくると、残りの卵囊が孵化するまでアリを抑えるため最後の努力をするよう、母クロゴケグモは残りの二匹の子供に卵囊を守るように命令しました。

しかし、戦いの統制はアリ軍隊にありました。最後の巣は今では解体され、催涙ガスはクモを眠くさせるもっと重い煙になり、アリはついにクモを取り囲んで縛り上げ「死に場所」の上まで下げて、柱にくくりつけました。

だがしかし、残りの卵囊は孵化する直前、それは何百ものクロゴケグモが生まれ出るということでした。

「早く！」医者アリは命令しました。「種ソースを持ってくるんだ！」

医者は祈りながら卵かかえないよう残りの卵囊に種ソースをかけました。そして感染しているところに特別な葉の免疫血清剤を注射しました。

「遅すぎないことを祈る」彼は思いました。

看護師が感染してるところと耳全体をきれいにしました。

「我々はできるだけのことをした。後は偉大なる精霊次第だ」と医者は言いました。

下の方では軍隊アリとゾウ達は女王の反応を静かに待ちました。

「みんなで集まって輪になって祈ろう」とおじいさんは言いました。

アリとゾウは大きな輪になって祈り、夜になりました。

早朝、看護師が疲れた医者を起こしました。

「何だ？」

「先生、来て見て下さい！来て見て下さい！」

すぐに彼らは走って感染したところを見に行きました。

「感染がなくなっています！女王は大丈夫です！」

医者と看護師はそのニュースを知らせるために急いで降りました。

まだみんなが輪になっているところへ、嬉しそうな医者ができる限り大きな声で叫びました。

「女王ゾウは生きられる！女王ゾウは生きられる！」

ゾウ達はジャングル全体を勝利の合図で揺らすまで、鼻トランペットを鳴らしました。

そのお祝いは午前中いっぱい続きました。そして午後には女王ゾウは自分の足で立ち上がり、みんなはさらに元気付けました。

アリ司令官は「死に場所」を燃やす準備をしました。クロゴケグモと4匹の子供達は女王の命を脅かせたためにその杭で焼かれるのです。

「司令官、私と4匹の子供の命をお助け下さい」

「なぜ我々がお前達の命を助けなきゃいけないんだ」と司令官は聞きました。

「数時間前、お前は私の兵士たちを殺そうと脅かせたんだ」

「私はあなたの兵士を殺そうと脅かせたことはありません。私は自分と子供の命を守っていただけです」

司令官は母グモの言い分とどちら側にも怪我人が出てないことを思い、ゾウ達と会議を開くことにしました。

ゾウ達と相談の後、怪我人が出ていないことを心に留め、司令官は3民族の言い分を持って母グモに近づきました。

「第一、母グモとその4匹の子供達の命は助ける。第二、母グモは今後二度とゾウの耳に入って卵嚢を産みつけないこと、第三、クロゴケグモは二度とアリ族に対して敵対視を持たないこと」

母グモはそれに合意して4匹の子供と共に釈放されました。

それからゾウの医者はおりの医者に尋ねました。

「我々の女王を助けてくれたお礼に何をしたらいいだろう」

「まず始めに、新しいお皿とカップはどうだ」とおじいさんは笑いました。

「真面目な話、あそこにある4つの大きな岩を私たちの入り口まで引っ張ってきてくれないか。そうすればどんな大きな動物が来ても、私たちの家をあの雷のようなジャンプで壊すことはできないから」

なのでゾウはその要望に応えました。

司令官と400名のアリは一梱のココナッツの葉と一緒に大きなゾウに乗って「もう帰っていいでしょうか？」とおじいさんに聞きました。

「ああ、もう行っていいよ」とおじいさんは答えました。

ゾウが発つ時ゾウの医者は最後に振り向き聞きました。「ところでおじいさん、ココナッツの葉とワラは何のためだったんですか？」

「ああ」おじいさんは言いました。「ワラは私が試している新灌漑プロジェクトのためだよ。ワラは中が空だから家に水を通せるでしょう。ココナッツの葉は従兄弟達にとってはアップルパイみたいなものだから」

-終わり-